

第六期神楽坂建築塾 講義録 Vol. 1

開塾講義（坐学）の内容

日時：5月8日（土）18時30分～21時 場所：高橋ビル地下2階
講師：平良敬一氏（神楽坂建築塾塾長・建築評論家）

2004年5月15日 編集発行、文責：神楽坂建築塾事務局
〒162-0805 新宿区矢来町114 アユミギャラリー Tel.Fax.03-3269-1202
http://ayumi-g.com/ E-Mail g@ayumi-g.com

ほんとうの豊かさとは

第六期神楽坂建築塾（2004年度）が新塾生・研究生・法人塾生合わせて62名でスタートしました。今期の通年テーマは「ほんとうの豊かさとは何か？」。第一回講座では建築に限らず、社会や家族に関わるさまざまな豊かさを多面的に考える視点を学びました。

<なし> 社会の動きと通年テーマの関係

こんばんは。平良敬一です。

今日はまとまった話しにならないかもしれませんが、最近私が考えていることを話していきます。最初にみなさんに見ていただきたいのですが、教室の壁面には第五期の修了制作を展示してあります。その中に、これまで神楽坂建築塾でおこなってきた全100講座のテーマと講師をプロットし、講義がどのあたりをもっているか示している作品がありますのを見て下さい。私はここには決定的に欠けているテーマがあると思いますので、そのあたりを話していきます。

現代は資本主義が高水準で発達し、市場経済が成り立っています。貨幣というものは世界中で使われるようになり、ヨーロッパでインターネット時代も、日本でも中国から貨幣が古くから使われてきました。そのような貨幣は世の中に影響を与えてきましたが、現代では文明の方向までも決めてしまうような働きをするようになり、私達はそこに巻き込まれて生活しています。

これまで神楽坂建築塾で取り上げてきたテーマもすべて市場経済と無関係に成り立っているテーマではありません。市場経済に巻き込まれて歪んだり、稀薄になっていたり、まともに見えていても違う実現の仕方があるのではないかと考え



たいらけいいち
平良敬一氏

1926年沖縄生まれ。
東京大学第一工学部建築学科卒業。
『国際建築』『新建築』『建築知識』『建築』『S D』等の編集者を経て、1974年 建築思潮研究所設立、『住宅建築』創刊。
1993年より相談役。
1997年日本建築学会賞受賞。
1999年より神楽坂建築塾塾長。北海道工業大学客員教授。

させられることもあります。

そして私たち自身が市場経済に巻き込まれ、労働者や会社員として大きな資本に買われて労働力を売り、市場経済の中に閉じ込められ自分自身が商品になってしまっています。その中では世の中にとってプラスに働く面もありますが、マイナス面も必ずあり、都市の空間にもその影響が現れていると思います。その結果、私たちがこうしたい、こうありたいと願ったり、都市の在り方に対して希望や理想を持っていてもその通りに働かず、私達の願いとは無縁なところで資本の力が進行しています。資本は世界を巡っているいろいろな出来事を起こしています。そのような世の中の動きとこれまで取上げてきた通年テーマの関係について話していきます。

今期の通年テーマは「ほんとうの豊かさとは何か？」。豊かさとはどういうことか、物質的な豊かさとは違う世界があるのではないかと私達は感じていて、豊かさには色々な内容があるのかどうかを考えていきます。実は、このテーマは鈴木喜一（神楽坂建築塾事務局代表）さんが考えてくれたものです。理論的に述べることは難しいなと思っています。しかし、暮らしの中でほんとうの豊かさについて考えることは決定的に重要であります。

母系社会の残る村

昨年、中国雲南省の古都麗江（リージャン）を訪れ、そこからミニバスで約10時間北上し、標高2690mに位置する瀘古湖（ルーグーフウ）畔のナシ族の村を訪れました。そこは現在も母系社会が残り、女性の系統で家族を維持し子孫を残していく母系家族が存在しています。今回の旅では、その母系家族や社会を見るのが一番の楽しみでした。

湖畔の集落名は舎枿村（シャコウムラ）といい、その長老（おばあさん）の跡を継ぐのはその長女の楊直瑪さんです。そのお宅に2泊させていただきました。楊さんの夫は隣村の落水村で暮らし、同居していませんでした。生業はお互い別々で、楊さんの家では屋敷内に小さな林檎園と家の裏側に畑が広がっていて農業を営んでいるようで、夫の方は林業をやっているようです。そのように夫と妻が別々に暮らし、経



基調講演風景

済的にも支え合うのではなく独立しているんです。それでも男女の安定した関係は成り立っているんですね。お世話になった楊さんの家は井幹式（木楞房／ムールンファン）と呼ばれる校倉造りで、そこで私達はみんなで実測や聞き取りやスケッチや写真を撮ってきました。母系大家族に適った構えの空間構成が読み取れますので是非見て下さい。（『月刊住宅建築』2004年6月号掲載予定）

ひとつでない家族のあり方

現在この湖畔の村々でもいくつかの父系家族や双系家族が現れ始め、母系でない家族が1割～2割あるようです。双系家族とは、おばあちゃん世代までは母系だけど娘の世代には双系になり夫と一緒に暮らし、その次の世代はまた母系に戻ったりする家族です。家族のあり方は私達が考えるよりも自在な組み合わせがあり変動しているようなんです。日本では人々が都市で生活するために次々と上京し、地方では過疎化が進み「ふるさと」や「家族」の在り方が崩れてきています。母系家族が理想的なものかどうかは別として、このような家族の在り方もひとつの在り方として参考になると考えています。

母系制や父系制についての研究は人類学者によってたくさん書かれています。それらの本を読むことは想像力が刺激されるので楽しんで読んでいます。昔と比べれば家族の形も変わってきていて、家族は崩壊してしまったり、もう話も通じなくなっています。それは本当に崩壊なのか、一時の現象にすぎないのか、わかりません。家系図や建築の形も都市の在り方に参考にしていくことなどで勉強しているところですが、形骸はどんな人たちを育てるものになるのでしょうか。

大都市の暮らしに最も欠けているものは豊かな自然環境です。それを満足させるために地方や世界へ旅に出るのです。場所の持つほんとうの豊かさを求めての旅です。ではほんとうの豊かさとはどういうものなのでしょう？

今、私が思う豊かな場所とは

- ・ 人が持続的に定住することができる
- ・ 文化が蓄積されている
- ・ 人と人との親密な関係が蓄積されている
- ・ すべての関係が人間の作品として蓄積されている
- ・ 上記のような蓄積が可能な場所であって、外の世界に対して開かれている

そういう場所だと考えています。僕はやむを得ず何度も引越をしていて定住できていません。これは豊かなことではありませんね。やはり、定住してその場所で自分なりの仕事を蓄積し、クリエイティブなものを残し、親友や家庭をつくっていくことが理想だと思います。

労働の考え方

労働は会社に勤めて体を動かし金を稼いでくることだけが目的ではありません。家庭や親しい仲間をつくって協働で何かをつくっていくことも重要な仕事なんです。典型的な例は昔の農村がそうですね。みんな村にとって必要な行為（例えば、道にわづらひに村人総出で行う）を無報酬の仕事として協働でこなしていました。人間は利己的な労働の他にも自分や社会のため時間や労力を注ぎたくて働きたいと思うんです。ここにいるみなさんは、ここで自分なりの時間を使って、立場や仕事に参加しようと思った方たちだと思っております。

場所の豊かさ

今、この村では観光ブームによって飛行場建設の話があがっています。そうなるとこの村に蓄積された目に見える歴史も失われてしまう可能性があり、人の動きによって社会が変わってしまう恐れがあります。

楊さんの家には15人の大家族が暮らしています。何でも簡単に手に入るといって、私達のような便利な生活環境ではありません。しかし、美味しい食べ物を実らす畑があり、美しい村や湖があります。豊かさの尺度はお金や車のある生活や広い家などだけでは測れないのではないかと感じました。

日本型の田園都市構想

社会というものは専門的なことを突き詰めているだけでは良ならず、専門外の幾多の価値を含めた総合的な価値によって成り立っているものです。そして社会づくりの根本には常に環境問題という総合的な価値を意識する必要があります。環境は自然と人間のコミュニケーションや協働の仕事によって出来るものです。お互いのことを知らなければ環境は良くなりません。それで田園都市構想を日本各地に定着させ広めて盛んにしていく必要があると考えています。

田園都市という理念は100年前のイギリスでエベネザー・ハワード（Ebenezer Howard,1850年～1928年）が定義したものです。随分古い話のように感じますが、日本の歴史を振り返ってみると古いものを切り捨て、新しいものをつくり、貴重なものをたくさん失っていることを反省しなくてはならないんです。もちろん、古いものばかり追いかけているのではなく、新しいものを生み出していくことも大切なことです。そのとき、祖先が創ってきたものをよく理解して新しいものを生みだすことが重要なことです。

ハワードのいう田園都市は、市街地の廻りに農村地帯のグ



井幹式住居の内部空間



井幹式住居建設現場



平良塾長と大橋富夫氏（写真家）中国ツアーの様子

リーベルトが広がり、その中に、海に浮かぶ舟のように存在する都市の在り方を求めたものです。農村集落はその外側にポツポツと点在するような姿をとります。その理

念の根本は「都市と農村の結婚」ということです。日本では、明治期の役人の中にもハワードの本を読み、レッチワースを訪れていた人がいたようですし、戦後も大平正芳内閣総理大臣（1978年12月～1980年6月）は田園都市国家論を提唱していました。ただし、「国家」を付けたところに違和感がありました。

しかしハワードの構想を今の日本にそのまま持ち込んで上手くいかないでしょう。なぜなら、日本では広々とした平原がある訳ではなく、山から海へと続く複雑な地形の場所が多いからです。そのような日本の地形や気候を活かして山と川と海を繋いでいくような構想が有効的だと考えています。また、人口20万～30万程度以下の中小都市を私はイメージしているので、大都市では難しいでしょう。

単に都市をつくるのではなく、田舎と都市を繋いでバランスのとれた生活環境を積極的に創り出し、田園の良さと都市の良さを兼ね備えた都市をつくるべきだと思います。田園都市の豊かさは自然です。自然に農業や工業のように手を加えなければいけません。人間がリソースとして使っているもので、神楽坂建築塾でも使っている産材を使い、伝統的構法で運動を通じて、山の問題や地方の過疎化の問題などいろいろな事が起こっている現状を変えていきたいものです。国産材一つを取り上げてもしいろいろな事が包摂されていて、それらの問題と田園都市構想を考えることは、一致して行動できる要素が多いんです。私達は良い環境を残しながら文化的な生活を営むことのできる都市をつくるために、お金だけでは得られない総合的な価値を実現していく必要があるでしょう。

世の中の変化と家族の変化

私は最近家庭の大切さを感じています。毎日テレビや新聞で家族に関する事件が報道されていて、それを見ていると家庭がここまで荒れたのは、戦後社会をつくってきた僕らにも責任があるのではないかと思います。私達の世代は、自分が夢中になれる仕事さえやっていけば、自然に世の中が良くなると思っていました。しかしその結果、勝ち組、負け組をはっきり分けてしまう厳しい競争社会を生んだのです。

昔は大人数の大家族が当たり前で人びとはそれをどこか振り所にしていた節がありました。今では都市化によってそれが失われ家族形態も変わり、大変な社会の渦のなかに核家族や個人が漂流しています。そんな世の中では家族に絡む事件も増えてしまうでしょう。

そうした複雑で過酷な環境に対して、そのすべてに自分を適応させていくなんてことはもう不可能なので、問題を改善するためには世の中の流れに適応していくことだけが必要なのではないでしょう。世の中の流れに抗して“別の歩み”を模索することが大事ではないでしょうか。私たちは経済原理や競争にあけくれて、家庭のことなど考えずに突き進んできたことに反省しなくてはなりません。しかし個人で反省していても世の中は良くなっていかないので、住みやすい環境づくりのために個人が個人の外に出て他者と連携し、協働社会を創っていくことを基本的な軸として行動していくことが一番大事なことにように思います。

「本当の豊かさとは」を考えていると、以上のようなことが頭に浮かんでくるのです。鈴木喜一さんは今どんなことを考えていますか。

歴史を見直し原点に戻る

鈴木喜一：平良先生のお話を聞いていて、研究生の方はこれまでの一連の講義を聞いているので先生の話しがある程度分かったのではないかと思います。新塾生の方がどんなふうに受けとめたのかなと考えています。

今日の講義は、平良先生の最近の関心が良く現れているなと思いました。神楽坂建築塾番外ツアー（2003年10月～11月）で雲南省を訪れ、僕も瀘古湖に残るモソ人の母系社会の集落を興味深く見てきました。ワールドワイドで外に出ていくという心や興味が湧いてくる。このテーマは「ほんとうの豊かさは何か」。これは番外ツアーで訪れた美しい農村風景から平良塾長が酒を飲ながら話した

「振り向けず未来がある」「過去を抹殺するな」と発言したことが深く印象に残っています。高度文明社会に置き去られていくものの中に、実はほんとうの豊かさが潜んでいるという視点を僕たちは忘れてはならないでしょうね。

今日の講義ではもう一つ、ハワードとは違う日本型の田園都市構想についての話しがありました。僕も平良先生や長谷川堯先生の影響を受けて、最近、田園都市構想のことを考える機会が増えました。つい先日開かれた神楽坂建築塾サロンもこのテーマでした。そんなわけで、このゴールデンウィーク、僕は山梨県の塩山や勝沼辺りの田園地帯を歩いていました。勝沼は伝統的建造物群保存調査実施地区で、東京から約100キロ程度離れた場所ですが山に囲まれた盆地で葡萄畑が広がり、古い建物もずいぶん残っていました。



100回の蓄積

第一期の平良先生の講義の中で「場所性への回帰」という話がありました。大都市の象徴的な景観、つまり超高層ビルの林立ような無国籍な景観に対し、地域性やそこにある歴史を大事にしていこうという姿勢ですよね。これがこの塾の底流にあるものだと思います。

神楽坂建築塾は1999年に第一期が始まり、今期で第六期を迎えました。つまり今までに100回の講座を重ね、これで101回目となるわけです。その他にも国内外でたくさんのフィールドワークを実施し、数々の場所体験を積んできました。そろそろ、ささやかな力ですがみんなで連携して現代社会に対して発言していきたい、人間のほんとうの豊かさとはこういうものではないかと伝えるできるようになりたいですね。

住宅から失われた風景

僕が生まれたのは昭和24年で、物心がつき建築の世界に入ったのは昭和40年代でした。この時期はちょうど高度成長期の頃で、我々は近代合理主義時代と呼んでいますが、スクラップアンドビルドが盛んに行なわれていました。僕も当時は防火帯としてのビル建築や娯楽施設などをつくっていて、神楽坂建築塾のような動きとは関係ないことをやっていた。発はしまし

あれから驚きました。日本の建築は何から脱出してしまった気がしす。た

円環するテーマ

第二期は「技能の復権」がテーマでした。僕も板金職人の息子でしたので、父親（親方）が尋常高等小学校や中学校卒の丁稚を使って技術を伝承していく様子を見ていました。技能はこうして覚えていくものなのか、そう思いながら子供の日々を過ごしていました。ところが、最近は頭でっかちになりすぎて、体がついていけない。多感な時期に身体で学ぶことが出来ない世の中になってきました。だからといって徒弟制度に戻れとは思いませんが、その頃のいいものを再考していく必要があるのかなと考えています。

第三期は「風景の構想力」。僕らのようなしがたない建築事務所では風景まで構想することはなかなか出来ないのですが、一点一点いいものをつくっていけばそれはいつか広がりを見せるのではないかと考えています。ただ、建築事務所としてはそういうことなんです。神楽坂建築塾というこういう運動体という場で考えた時、風景に対してもう少し突っ込んだ意見が言えそうだなという予感がしてきています。つまり、建築塾は同志の集まりであって、そこで互いに連携して風景をあるべき方向に持っていくというか、方向性を指し示

すというようなことはできるんじゃないかと。

第四期は「まちと建築の再生」、第五期は「人が住むって何だろう」と続くわけですね。そして今期は「ほんとうの豊かさとは何か」。

もちろん良い建築や環境・景観をつくるのが大切ですが、平良先生の話しにも出てきたように人間の労働についても考えてみたいですね。

最近、僕の本『大地の家』（PMC出版刊・1988年刊）を自分で読み返してみました。この頃の考え方は今もあまり変わっていないなあと思いながらページを繰っていたんですが、ジョン・ラスキンの著書を引用したくだけがあるんですね。

「ほんとうに豊かな人というのは自分自身の生を極限にまで高めていった人なのかもしれない」

「『生』以外に富というものは存在しない」

つまりラスキンは、人間の喜びというものは自分の生を限りなく高めていくこと、自分の生きていく機能を高めていくこと、だと言っていて、それこそが豊かな人生だとも語っています。とても重要な言葉だと思います。

これから一年間みなさんと一緒に「ほんとうの豊かさ」について考えていきますが、これは一年限りのテーマではなくて、いままで取り上げたテーマもすべて円環をなして関わっていることだと考えてください。

自分の決意としては六期までやってきたので少なくとも第10期くらいまでは続けて、社会的運動にしていきたいと思

神楽坂建築塾の仲間

恭之：僕もみなさんと一緒に歩

ながら、この建築塾にある大きなテーマを円環で考えています。僕が建築を志すようになった時はモダニズムの流れの中にあり、コンセプチュアルなことが良いとされていました。そして、建築家の磯崎新さんや篠原一男さんなどは建築を造形としてとらえ、美的な論理でつくりあげていき、僕はそのような洗礼を受けていました。私の先生も坂本一成という建築家なのですがやはり理詰め

で考える人でした。建築を理詰めで考えるようになったのは、ルネッサンス時代のパラディオという建築家が合理的に言葉で形にしていたことが始まりではないかと思

います。そのような合理的な考え方を大きな柱として、建築を数量的に考える教育を受けてきました。そして実際、設計事務所では、多摩ニュータウンのような集合住宅の群をいかに効率良く配置していくかという技術を磨き設計はそれでいいのだと思っていました。しかし、結婚をして家庭を持つようになってから考え方が少しずつ変わってきて、最近は環境や場所や山のこと

も同時に考えるようになってきました。毎年ここには60人くらいの人が入ってくるのですが、その中には設計者や職人さんや主婦の方もいて、それぞれの立場で日々戦っている問題を持ち寄っている